

はたらき人

沖縄県那覇市首里石嶺4-356(〒903)
 事務局
 聖書学校
 (電) (098) 937-8988
 神学校
 (電) (098) 884-4391

沖縄信徒聖書学校
 沖縄聖書神学校

選民イスラエルの人々が、約束の地カナンに入ろうとしている時に、神がヨシヤに語られたみ言葉は、卒業して教会、伝道に入ろうとする者、また実社会に務められる諸兄弟姉にも意味深い励ましと祝福のみ言葉である。

旧約のヨシヤ記一章を聞くとき、ヨシヤに与えられた三つの大切なみ言葉をよむことができる。

① 強く雄々しくあれ

「わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいるであろう。私はあなたを見放すことも、見捨てることもしない。強く、また雄々しくあれ」(一・5) 「わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ、あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない」(九)。

これがヨシヤに与えられた第一のみ言葉である。約束の地カナン



大志をいだけて進め

沖縄聖書神学校

校長 渡真利 文三

に色々の困難があったように、この世にも、色々の困難、自分の思うようにならないことが多くある。又、世には信仰に対して試みとなるようなことが数多くある。それで気をくじいて恐れおののくことがありがちなのである。しかし、神はヨシヤに雄々しくあれ、強くあれとお命じになっておられる。すなわち、この世には色々なことが起る。しかし、神は信じる者と共におられるから、強く雄々しく前進せよとおっしゃる。

② 足で踏み所は与える

「あなたがたが、足の裏で踏み所はみな、わたしがモーセに約束したように、あなたがたに与えるであろう」(二・3) と記されている。

この世の中に出てゆかれて、棚からポタ餅を期待する姿勢ではなくして、自ら進んで、自分の足で踏み取るというような積極的な努力が必要なのである。このことは

神が、ヨシヤに与えられた第二のみ言葉である。どうぞ皆様、世の中で働くとき、自分の足で踏みとっていくという積極的な姿勢をもって戦ってほしい。

③ 律法を守り右に左に曲るな

そしたら勝ちを得る

「ただ強く、また雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなた命じた律法をことごとく守って行い、これを離れて右にも左にも曲ってはならない。それはあなたが行くところで勝利を得るためである」(二・7) と記されている。

神は、律法(み言葉)を離れて右にも左にもそれないように守ってゆくように。それが勝利の秘訣なのだとおっしゃっておられる。

みなさん、この世において失敗者でなく勝利者として進まれることを願うのであるが、そのためには神のみ言葉から右にも左にもそれないで、これを守って勝利を得てゆくよう祈るものである。

さらに律法の根本精神は、まず神を愛し、それに基づいて人を愛するということである。その精神からそれないように、しっかり守って勝利を得られるよう祈る。どこへ行くにしても、キリストの名によって求むことを心がけるよう願ってやまない。

伝道の第一戦へ

二名の卒業生を送り出す

去る三月一九日午後三時より沖縄祈禱院において、沖縄聖書神学校の第四回卒業式がとりおこなわれ、二名の兄弟を送り出しました。

◎第四回卒業生
 喜友名朝順(牧港中央バプテスマ教会)
 平安座幸恵(具志川福音自由)

兄弟は母教会において協力伝道者として、姉妹は武庫之荘福音自由教会にて一年間のインターンをする事になっております。それぞれ遣わされたところでの活躍が期待されます。さらなる祈りをお願い致します。

二対一六

喜友名 朝順

「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」(ヨハネ二・一五)。「わたしは毎朝、このイエス様のお言葉を自分の聞わばいけませんね。教会は職業ではありません。ですから並みのことをしていたのでは教会はできませんよ。他者のためにいのちを捨て

たつた二人の神学生に対して神様は、四年間一六名の先生方のこのような講義を通して、牧師の在り方を直々に教えていただきました。長い教会経験を通して、「主がいかにか先生方を用いられたか、また先生方がどのように御言に従いつつ主に仕えられたか」、講義の間に語られるそのような経験は、大きなプラスになりました。原語や神学の講義の合間を織り成すように語られる経験談は、ある意味ではその講義が日々の教会において適用され、実践されているのを聞かせていただけるので大変有意義なものでした。

神原康夫先生の「教会と伝道者教育」という講演の中のお言葉ですが、「地元教会とその牧師が積極的に伝道教育に携わる場合の利益というものは、語り尽くせない

四年間を振り返って

平安座 幸恵

私が神学校に入学したのは、主の御言葉を握り締めて、前進するのみと一歩踏み始めたことによりです。入学の思いは度々ありましたが、何度も道は閉ざされ中々開かれませんでした。思いが与えられてから入学までの期間は、約十年余を経ましたが、私にとって良い時であり、また地元神学校へ入学できたことは感謝なことでした。

神学校とはどのような所か全分からは私に、入学しての第一関門は、通学距離と長時間との闘いでした。指導して下さる先生方の教会を回わるのです。慣れるまで大変でしたが、やがて諸教会を

訪ねることの楽しみも増えてきました。第二関門は語学でした。とてもおもしろい。なんとか追いつきたいと思えばあせるほど頭の中がパニック状態。さすがに「私は疲れた所に来たなあ。今だったらこれを理由にして逃げられる」と、主に「どうぞ、出て行け」とのお言葉を。と、誰よりも熱心に求めたものでした。しかし、主のお言葉は私が願っていたお言葉ではありませんでした。「前進し続けよ」でした。第三関門は断食祈禱でした。一日の断食もしたことの無い私がどうして十日間の断食ができるのでしょうか。今度こそ、これを機会にと主に「今度こそ主よ、出よ」とのみ言葉を、あるいは餓死でも構いませんから……と。しかし、まあ、ピンピン元気で十日間を終えてしまったのです。私の前に、次から次へと難関が待っていました。今振り返ってみて、それは主が私に対して「子羊や羊を飼う者」への方向づけと、確信を与えるものであり、全能の神をより深く知る事の配慮であり、導きであったと深く感謝します。

この四年間、地元で教会する先生方ご夫妻の生きざまを見せて頂いたことを深く感謝致します。祈り支えて下さいました方々に深く感謝いたします。

